国際シニア合唱祭

ゴールデンウェーブin横浜

5

彩の国プラチナ混声合唱団

「春の日」上田真樹先生の助言を実践

2024年3月20日

全7回の練習のうち残り3回となった3月19日、「春の日」の作曲家上田真樹先生に指導して頂いた内容をどこまで実現できるか、ブラッシュアップを目指して取組みました。この曲は「死を悼むレクイエムではなく、温かい気持ちで死者の魂と心を通わせられるようなレクイエム」を目指しており、無宗教のレクイエムとして日本人誰もが共感できるのではなかろうか。

> レクイエムは、ラテン語で「安息を」という意味の語であり、以下の意味で使われる。死者の安息を神に願うカトリック教会のミサ。死者のためのミサ。本来の典礼から離れて、単に「葬送曲」、「死を悼む」という意味で銘された作品。同一のラテン語のテクストに多くの作曲家が曲をつけている。モーツァルト、ヴェルディ、フォーレの3作品は特に名高い。かつて日本では「鎮魂曲」と訳されたが、レクイエム自体に本来神道の用語である「鎮魂」の意味はないため不適切な訳語として現在は単に「レクイエム」か、もしくは「死者ミサ曲」、「死者のためのミサ曲」などと訳される。

「春の日」の43～60小節に出て来るソロは、「Tenore ossia Soprano Solo」(テノールまたはソプラノソロ)と指定されている重要な箇所です。

ソ　ロ	合　唱
悲しみはいつか薄れるとも 身にしみてわすれはすまい そうじゃないか？ それが命というものじゃないか？	悲しみはいつか薄れるとも 身にしみてわすれはすまい

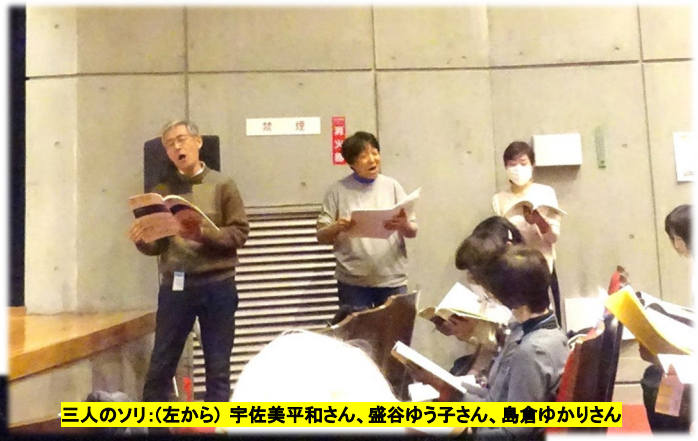
上田真樹先生によれば、ソロと合唱の役割、位置づけは次のように解釈してほしいと仰っていました。

上田真樹先生

「ソロの部分は、遺された人の個人的な表現であり、感情であり、その背後の合唱は、亡くなった人の魂が、悲しむものではない、と後光が差しているかのような、遺された人と魂が会話しているような形になっている。このようなことを想像しながら歌ってもいたい。高い音の部分では難しいと思うのではなく、そこから離れてイメージのところで歌った方が歌いやすいと思う。ソロはきれいに歌うというより、噛みしめるように感情を爆発させてよい。現実に切ったら血が出る生身の人間がいて、その後ろから天使の合唱が慰めるように流れてくる。こうすることで音楽が立体的になり、歌うことが苦しくなくなるのではないか。」

ソリスト決まる！

懸案となっていたソロは、テノール宇佐美平和さん、ソプラノ盛谷ゆう子さん・島倉ゆかりさんの3人でソリとして担当することになり、早速息の合ったアンサンブルを聴かせてくれました。


三人のソリ：(左から) 宇佐美平和さん、盛谷ゆう子さん、島倉ゆかりさん

指揮：小野瀬照夫（埼玉県合唱連盟理事長）

ある参加メンバーは「上田先生のレッスン（3月13日）があって次の練習なので、みんなの意識が変わったように感じました。先生の作曲の意図を表現しようという気持ちなのかな？美しくなっていると思います。」と感想を述べていました。また、実行委員の一人も「上田先生のレッスン後、初めての練習でしたが、曲が変わっていました。曲のイメージを細かくわかりやすく伝えてくださった上田先生のレッスンをしっかり受け止めたのだと思います。得がたい経験でした。イメージを言葉にして伝えるって難しいけど、とても大切なことだと実感しました。」と手ごたえ十分であったことがわかります。おそらく他のメンバーも同じように感じながら歌っていたことはまちがいないでしょう。

次回の練習は、4月5日（金）さいたま芸術劇場地下2階大練習室で行います。練習も残すところあと2回となりました。可能な限り譜面を離れて自信をもって自由に歌えるようにしたいものです。

Back
彩の国プラチナ混声合唱団TOPへ
Home
HOME PAGEへ